歴史点描３２　　網干出身のジャーナリスト太田宇之助と「網干町歌」

「愛せよ網干を　われらが網干を・・・」で始まる網干町歌。あぼしまち交流館前には歌碑もあり、作詞が北原白秋というビッグネームであることはご存じの通りだが、この北原白秋に作詞を依頼したのが、網干出身のジャーナリスト太田宇之助なのだ。

自叙伝によると、太田宇之助は興浜の「しばぜん」という乾物店の四男として明治 24 年 10 月 8 日に生まれた。学業は優秀だったようで、新築校舎の開校式には総代として答辞を読んでいる。また明治 37 年の太田家の小使日記には、「二拾三銭　英誌読本」などの記載があり勉学に勤しんでいたことがわかる。12 歳で父を、15 歳で母を亡くした宇之助であったが、高等小学校卒業後、従兄の山本真蔵（後の網干町長）の援助を受け、姫路中学に進学。その後も苦学を続け、早稲田大学専門部政治経済科 2 年に編入している。この苦学の最中に出会った人々が、その後の宇之助の生涯に大きく関わってくるのであるが、孫文の第三革命に参加したことは特筆すべきであろう。早稲田大学を卒業後、大正 6 年大阪朝日新聞社に入社し、北京、上海勤務の後、大正 12 年から東京朝日新聞本社に転勤している。

そのころ網干では、宇之助の従妹である水田静枝（元網干婦人会長）が網干小学校校長北山虎吉（T 12. 6～S4.4 在任）らと、のちに網干幼稚園となる日曜幼稚会を立ち上げる活動をしていた。その縁からか北山校長より「網干町にも町歌がほしいから、最も適当と思われる先生に作詞を頼んでほしい」と、宇之助に依頼があったという。宇之助は、突然の依頼に驚いたが、北原白秋に白羽の矢を立て、朝日新聞記者ということで口説き落としに成功。しかし何度足を運んでも、なかなか取り掛かってくれない白秋にしびれを切らし、昭和 3 年二度目の東京勤務の時に直接説明に行ったのだ。「一度でも網干町を訪ねなくては実感が出ないからという白秋氏に、私は網干に関する詳細な資料と環境について説明した結果、これを材料にして幾月かの後にやっとあの町歌を作ってくれた」と『網干小学校百年史』太田宇之助の寄稿にある。たしかに、「網干町歌」原本の厚紙表紙には、昭和 3 年 10 月 27 日と記されている。

太田宇之助は、昭和 3 年 7 月から妻帯で留学している。朝鮮からシベリア鉄道でモスクワ(1 か月)、パリ経由ロンドン（８か月)、中欧諸国の観光をしたのち、大西洋をアキタニア号で横断、ニューヨーク（１か月)、そしてサンフランシスコから東洋汽船のコリヤ丸で太平洋横断し、翌年９月に横浜へ帰国している。世界を目の当たりにし、その後も中国通のジャーナリストとして活躍してきた太田宇之助であるが、心の中にはいつも幼いときに見た「美し家島、沖の雲」が輝き浮かんでいたのである。

網干歴史講座　御津町　植田　実加子

大甥と墓参りをする晩年の太田宇之助

網干小学校校長室に掲げられている網干町歌原本